

<書評>

谷川至孝・岩槻知也編著

『子どもと家庭を包み込む地域づくりー教育と福祉のホリスティックな支援』

晃洋書房 2022年3月

河野和枝（さっぽろ子育てネットワーク）

非常にわかりやすくなる本であり、筆者にとっては、初めて出会ったと言えるほどまるごと興味・関心のある内容だった。最初に、書籍名『子どもと家庭を包み込む地域づくり』に「おう！」と惹かれ、その上、サブテーマのー教育と福祉のホリスティックな支援ーの文言に大いに惹かれたまま、読み進めていくうちにどんどん活動が導かれていく内容だった。この理由を、私事と重ねて最初に記すことをお許し願いたい。

筆者は、市民団体さっぽろ子育てネットワークの活動に、1995年設立以来30年近く中心に関わっている。乳幼児の親を対象に始めた「ひとりぼっちの親をなくそう！」をコンセプトに子育てネットワーク活動を始めたが、子育てネットワークとはどのような活動をすべきか全く分からないまま、それでも参加する親たちのニーズに合わせてながら、試行錯誤の活動が展開されていた。活動理念を社会教育のひとつと位置づけ「子育て・子育て・親育ち」とし、「ともに育ち合おう」とした。当初、子育てネットワークは、子育て支援の活動だから福祉領域、社会教育とは異なるとも言われた。それでも私たちの活動は、学習ネットワークであるから社会教育であると言い聞かせ、悩みながらの活動を続けた。子育てに関わる学習活動を柱に市民を組織し、創意工夫し実践してきた。学びの主体は、当事者（親たち）が中心ではあったが、関連する子育て団体と協同し、スタッフの学習会、子育て援助を考える会を開催し、現在に至っては、子育てや家族支援に関わる団体等とのネットワークをより広げ、孤立・孤独、貧困、家族問題、ジェンダー問題、虐待など現代社会を反映する構造的な社会問題と向き合い「居場所ネットワーク」の活動に発展させている。この間の経験では、市民同士の連携の困難さはあまり感じられない。しかし、行政や学校との関係を進めることは、何かと難儀な現実にも悩まされ、まさしく、教育と福祉のホリスティックな支援に課題を抱えていたこともあり、この本に示される実践事例は大いに刺激的で参考になった。この3月「さっぽろ子育てネットワーク設立25周年記念誌」を発行し、今後の活動展望に、「教育と福祉を統合した地域づくり活動」とした。まさにタイミングが良く、この本と出会った喜びは格別であったというわけである。

さて、私事はさておき、この本についての紹介に入る。

最初に目にとまる帯封、「すべての子どもと家庭にウェルビーイングをもたらす地域づくり」、続けて「ボランティア組織、社会福祉協議会、子ども食堂、学校、児童相談所、

地方自治体、国……様々な機関が連携して住民が主役となる地域づくりのモデルを紹介し展望する」とある。これを読んだだけで、本の内容が端的に示され、今日、多くの国民が抱えている社会問題・課題へとアプローチしていることを理解し、同時に「すべての子どもと家庭」が対象であることは筆者の共感と大きくつながることになる入り口であった。

序章は、「地域づくりを考える際の視点－日英の比較から－」、英国の地域再生政策と教育の関連が書かれ、日本の政策とも比較している。その上で、「わが国らしい政策転換のあり方」があるはずと提起している。確かに、政策的課題と実現は、蓄積された国の歴史を放置しての政策転換は、絵空事であり「わが国のあり方」があるのだろうと考えさせられる。

第1部は、先進的地域の取り組みとして、第1章 沖縄県一内閣府の補助金を基盤とした取り組み、第2章 滋賀県一社会福祉協議会を中心とした取り組み、第3章 明石市一首长の政策展開に基づく地域づくり、第4章 大阪市西成区一ボランタリーセクターの伝統的な活動と、4行政区の聞き取り調査を基に実践事例を丁寧に記述している。どの地域もこれらの実践には聞き覚えがあるが、今日の課題解決に果敢に挑戦する実践を過去の実践を掘り起こしながら重ねて綴り、モデルとなる特色ある事例として整理している。中でも筆者の目にとまったのは、大阪市西成区の活動である。ボランタリーセクターが行政や学校を巻き込み地域づくりに大きな役割を發揮するこの実践は、公的な責任を問う課題を追求するものである。福祉領域にはびこる行政の委託事業は、民間への丸投げともなり公的責任を減退させ、否、公的責任とは？を問う姿勢さえ危うくする。行政と民間の垣根を越える実践の見通しを持たせてもらえる示唆がある。

第2部は、ボランタリー組織の取り組みが記述されている。第5章 京都市山科醍醐子ども広場、第6章 沖縄市ももやま子ども食堂、第7章 大津市子どもソーシャルセンター、第8章 高槻市タウンスペースWAKWAKと実践録は続き、どの活動実践も地域の状況としっかりと向き合い優しい市民パワーを全開している。中でも第7章で紹介されている、子どもソーシャルワークセンターの活動は、強い関心につながった。欧米では、子どもに関する専門職がしっかりと養成され、制度にも組み込まれ、現場で課題解決の担い手として活躍していると紹介されているが、わが国では、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーくらいしかない。しかも、機関の中での集团的役割と機能が確立していない。子どもソーシャルワークなどは、地域のすべての子ども支援者として専門職化され、全国の各地域に配属すべきだと強く感じる。

終章は、「ケア」が息づく地域づくり、を地域づくりの定義、ソーシャルキャピタルの考え方、その上で「ケア」とコミュニティの視点を編著者の岩槻氏がまとめ、この本の中に示された各地の実践を理論的に裏付けしている。筆者にとってもあらためて納得する記述であった。また本の表題にもある「地域づくり」をこの本はどのように定義しているのか、くみ取れないまま読み進んだが、この終章において、明確な定義が示され納得する。

また前後するが、編著者の谷川氏は、「はじめに」の中で、この本書のアプローチ・特徴を①学校は地域の中の重要な機関ではあるが、あくまでも地域を構成している一機関として捉える、②地域づくりではボランティア組織が核となる役割を果たしうる。そのボランティアに着目する、と記し、この視点が実践事例の紹介において貫かれているため、すっきり整理され理解しやすい。反面、すっきり整理されているが故に、読者にとっては、ときどきその場で「その事業の担当はどのような人が担っているの?」「スタッフはどのように動いてその結果が導かれたの?」など、質問をしたくなる衝動に駆られることも多かった。また、活動に登場するスタッフや参加する当事者の声、つまり子どもや大人たちの声とともにその意識変容が記述されることで事例のリアルさと真価につながると感じたがどうであろうか。

最後になるが、多くの地域支援は、住民ニーズから始まり住民の担い手により活動が展開されてきた歴史がある。このことは、この本からも伺える。現在も子どもや家庭に関わり現場を担い奮闘している多くの活動家が全国にいる。ぜひこれらをみなさんに読んで頂きたい。地域で求められる「教育と福祉のホリスティックな支援」に結びつく実践のバイブルとなることまちがいないと筆者は考え大いに推薦する。